

■ 原著 ■

教育実習生の授業中における身体活動

—— 小学校の体育授業において ——

浅見 裕*

(1987年1月20日受理)

Utaka ASAMI

Physical Actions Used by Student Teachers in Class —Physical Education Lessons in an Elementary School—

授業分析研究では、言語活動を分析する方法が多いが、体育の授業では教師の身体活動についても分析が必要と考え、昭和61年度の小学校での教育実習における実習生の二つの体育授業を対象として、授業者の身体活動が生起する分布状況を明らかにした。

実習生の体育の授業では、身体の動作を意図的に行うことによる教授活動には、授業の構成が変わったことにより1回目の教壇実習と4回目では相違があった。しかし、どちらの授業においても授業者が手本を示す教授法によって指導していることは変わっておらず、教師主導型の教授法のままであった。

[キーワード] 授業分析, 体育科教育, 教授法, 教育実習, 身体活動

I はじめに

授業分析研究には、授業中の言語活動を分析する方法がある。¹⁾しかし、体育の授業における教師の教授活動を研究対象とする場合には、言語活動は勿論であるが、教師の身体活動についても分析が必要がある。それは、体育実技の指導においては、学習者が教師自身の身体の動きを観察すること

によって学習課題を理解することが多いからである。

ここでは昭和61年度の小学校での教育実習における実習生の二つの体育授業を対象として、授業者の様々な身体活動の分析状況を明らかにするために、授業者の身体活動を10個のカテゴリーに分類し、授業時間を2秒間毎に区切り、その中で生

* 岩手大学教育学部保健体育科

注)

1) 加藤幸次著「授業のパターン分析」(明治図書, 1977.)では、フランダースの授業分析の方法を紹介している。この方法は言語活動の記録をもとに分析するものであり、日本でも授業分析の手法として数多く取り入れられている。

起している行動についてカテゴリー化を行った。
このデータを基に、実習期間における実習生の授業の積み重ねによる授業中の身体活動の変化についての考察を行った。

II 研究方法

1. 観察対象授業について

昭和61年9月10日及び昭和61年10月1日の両日に行われた、本学教育学部小学校教員養成課程在籍の保健体育科所属学生S君が、教壇実習として小学校5年生のクラスを指導した2回の体育授業を対象とした。

S君にとって、9月10日の授業は教育実習での初めての体育の教壇実習であり、10月1日の授業は研究授業として実施され、体育の授業としては彼自身4回目であり、また教育実習最後の教壇実習でもあった。昭和61年度の教育実習において、体育の教壇実習を4回も行い、なおかつ1回目から4回目まで同一教材(マット運動)を行っている実習生は2名だけであり、S君はその一人であった。

授業内容は、1回目の授業では主教材としてマット運動だけであり、一方の4回目の授業では長なわとびとマット運動の二つが主教材であった。

2. 分析方法

授業中の授業者の姿を、ビデオカメラ(ナショナル、マックロードAG 200)で捉え、10分の1秒単位のタイマーを画面にダビングし、2秒間隔毎に授業者の行動について観察し、2秒間のほとんどを占める身体行動について①～⑩のカテゴリーを当てはめた。ただし、2秒間の中で1秒未満であっても、授業者の意図的と思われる身体行動があった場合には、その2秒間については意図的

行動のいずれかのカテゴリーに当てはめた。

1 カテゴリーの単位時間は2秒間としたわけであるが、言語活動についての授業分析研究ではそれを3～4秒間²⁾に区切って行われてもいる。

教師の身体活動においては、スポーツ活動中のような素早い動きは少ないが、それでも2秒未満での活動はかなり多く見られる。従って、3～4秒間の設定であれば設定時間中に複数のカテゴリーが入ってしまうことが多くなり、どちらかのカテゴリーに吸収されてしまい、結果に相違が出てくる。そこで、カテゴリー化の結果と実態とが相違しないようにするために、身体活動についての分析では1 カテゴリーの単位時間は2秒に設定した。

また、授業者にはマイクロカセットテープレコーダーを携行させ、授業中の言語活動をも収録したが、紙面の制約によりここでは言語記録についての検討は割愛した。

なお、カテゴリー化の対象時間は、授業開始のあいさつのための「礼」の行為から、授業終了のあいさつの「礼」の行為までと限定した。

3. 教師の身体活動カテゴリー

①一言であり、立ち尽くしている=身体活動が見られない。ただし、「顔の向きを変える」はこのカテゴリーに含めた。

このカテゴリーでは、観察・聴取・黙読等の教授行為が行われているとも言える。

②一言活動は行っているが、身体活動は見られない(ただし、「顔の向きを変える」はこのカテゴリーに含めた)。

このカテゴリーでは、言語による教授行為が行われているとも言える。

③一言活動を行いながら、言語内容とは関連の無い身体活動がある(例えば、汗をふく・足を前

2) フランダースの授業分析法では、3秒間に区切っている。木原健太郎/山本美都城編「よい授業を創る授業分析法」(明治図書、1979)では、4秒間に区切った方法を報告している。

後に踏みかえる・頭をかく・ズボンを引き上げる等)。

このカテゴリーでも、言語による教授行為が行われているとも言える。

④—無言で③と同様の身体活動がある。

このカテゴリーでは、①と同様に観察・聴取・黙読等の教授行為が行われているとも言える。

⑤—各グループ又は個人の間を、教室内の机間巡視と同義の教授行為として、移動(歩く・走る)する。

⑥—準備・片づけ・示範・説明を行うために、移動(歩く・走る)する。

*①～⑥のカテゴリーでは、表情・視線などによる学習者への意図の伝達についてはVTRの画面からは不明である。

⑦—示範(「学習者には観察させ、教師のみ演技

する」の意味に限定した)する。

⑧—言語活動を伴なう場合と、身体活動のみの場合の二通りがあるが、学習者に対する指示・説明の動作を行う。

⑨—援助・評価を行う(学習者の体に触っての補助、拍手、うなずき等)。

⑩—参加する(児童と共に、同じ運動を行う。)

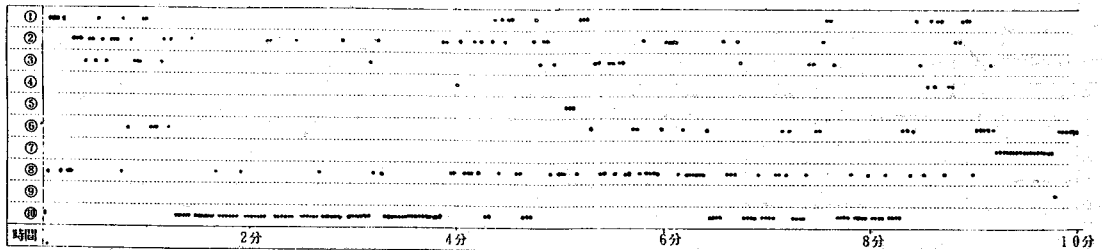
⑦～⑩のカテゴリーは、授業者自身が身体の動きそのものによって意図を伝達しようとする意味を持っており、体育授業に見られる独特の教授活動であろう。

Ⅲ 分析結果

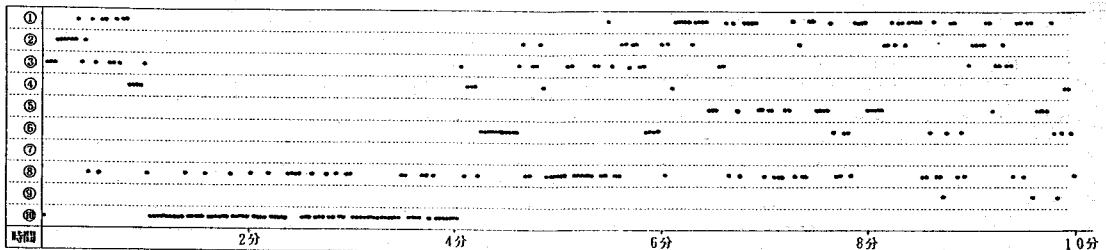
1. カテゴリー分布図(図-1～図-5参照)

図-1. 開始～10分

S君の1回目の授業における身体活動のカテゴリー分布 その1



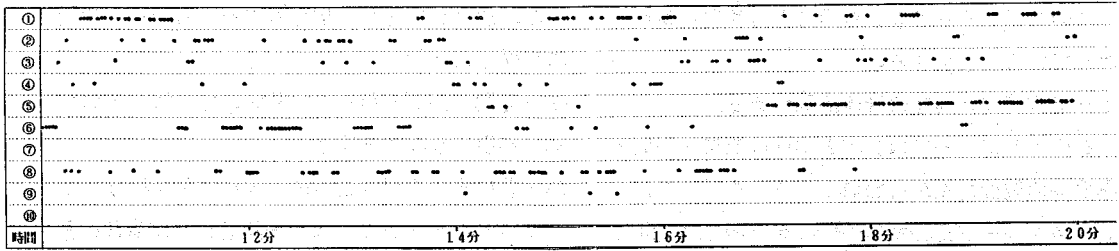
S君の4回目の授業における身体活動のカテゴリー分布 その1



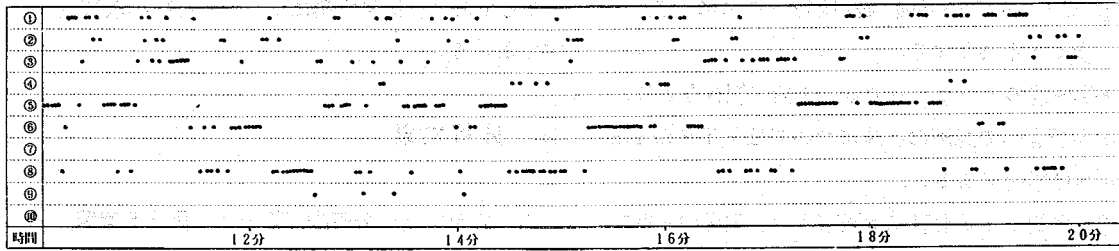
(図1 開始～10分)

図-2. 10~20分

S君の1回目の授業における身体活動の 카테고리分布 その2



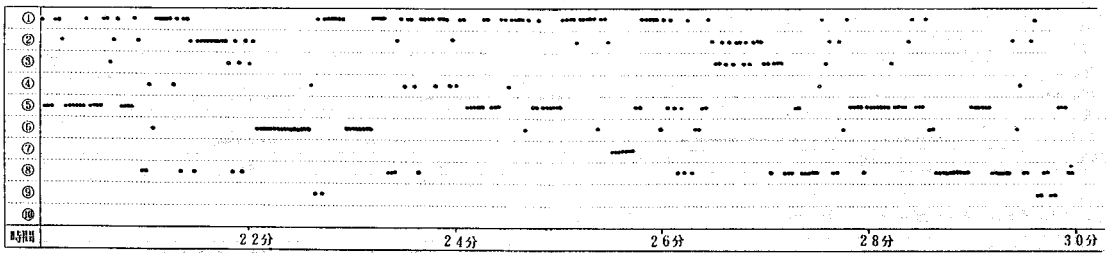
S君の4回目の授業における身体活動の 카테고리分布 その2



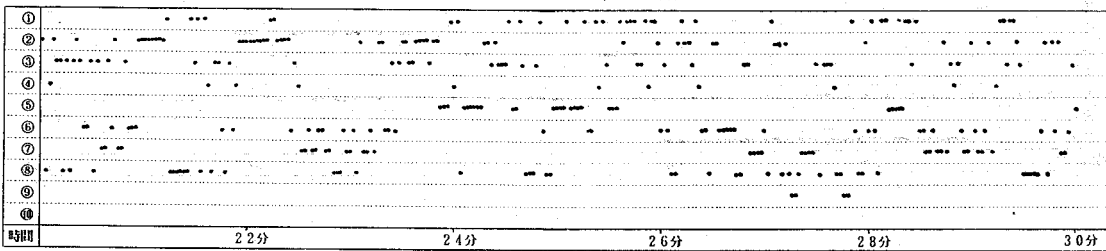
(図2 10~20分)

図-3. 20~30分

S君の1回目の授業における身体活動の 카테고리分布 その3



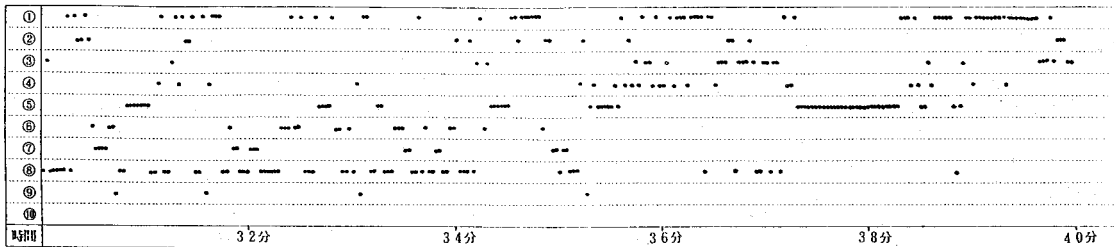
S君の4回目の授業における身体活動の 카테고리分布 その3



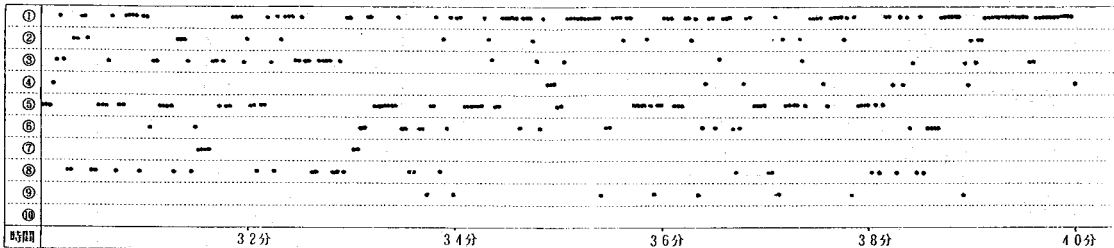
(図3 20~30分)

図-4. 30~40分

S君の1回目の授業における身体活動の 카테고리分布 その4



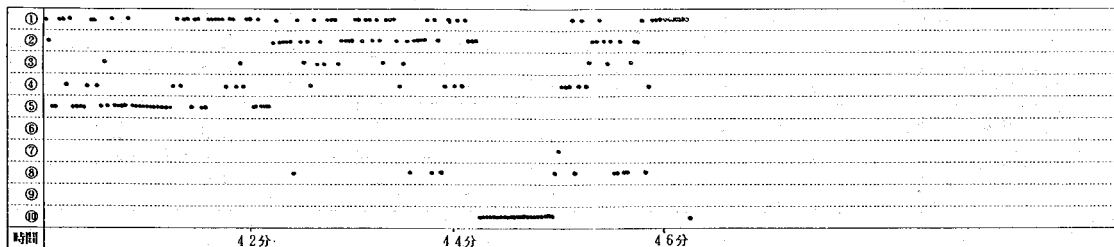
S君の4回目の授業における身体活動の 카테고리分布 その4



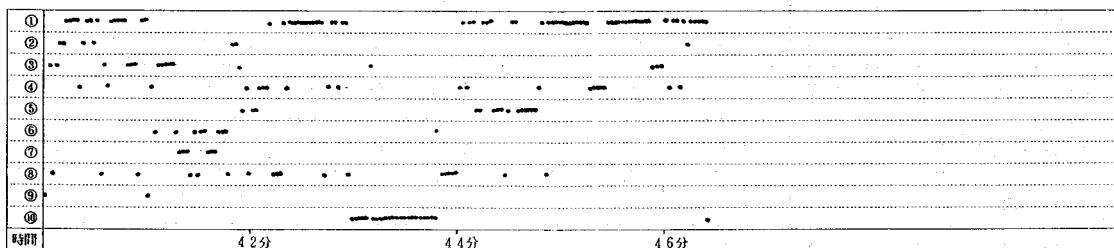
(図4 30~40分)

図-5. 40~終了

S君の1回目の授業における身体活動の 카테고리分布 その5



S君の4回目の授業における身体活動の 카테고리分布 その5



(図5 40~終了)

2. カテゴリー分布数値表 (表-1, 表-2参照)

S君の1回目の授業の身体活動の分析結果

表-1

カテゴリー		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
授業過程											
内容確認 準備運動	2分	8	13	7	0	0	5	0	7	0	20
	4分	0	7	1	0	0	0	0	5	0	47
	6分	8	9	8	1	3	4	0	22	0	5
	8分	2	7	4	0	0	6	0	17	0	24
	10分	7	2	2	4	0	14	17	5	1	8
目標の確認	12分	19	9	4	4	0	14	0	10	0	0
	14分	2	14	5	1	0	21	0	17	0	0
マットの 準備	16分	16	1	1	10	4	6	0	19	3	0
	18分	9	7	12	2	16	1	0	13	0	0
マット運 動の練習	20分	14	4	5	0	35	2	0	0	0	0
	22分	16	15	3	2	17	1	0	6	0	0
カード記 入 (自己 の目標設 定)	24分	21	3	1	5	0	24	0	4	2	0
	26分	28	2	0	2	18	3	0	7	0	0
	28分	6	11	12	1	12	3	0	15	0	0
自己の課 題技 (マ ット運動) の練習	30分	3	3	1	1	22	3	0	23	4	0
	32分	11	5	2	3	7	4	6	20	2	0
	34分	7	0	0	1	6	14	7	24	1	0
	36分	12	7	5	8	13	2	4	8	1	0
課題技の 試技	38分	12	3	12	6	21	0	0	6	0	0
	40分	30	3	8	5	13	0	0	1	0	0
カード記 入 課題把握	42分	22	1	2	8	27	0	0	0	0	0
	44分	19	22	6	3	6	0	0	4	0	0
整理運動	46分	9	10	3	8	0	1	0	7	0	22
挨拶	16秒	7	0	0	0	0	0	0	0	0	1
合 計		288	158	104	75	221	128	34	239	14	127
比 率 (%)		20.75	11.38	7.49	5.40	15.92	9.22	2.45	17.22	1.01	9.15

S君の4回目の授業(研究授業)の身体活動の分析結果

表-2

カテゴリー		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
授業過程											
内容確認 準備運動	2分	7	7	9	4	0	0	0	6	0	27
	4分	0	0	0	0	0	0	0	16	0	44
長縄跳び の説明	6分	1	7	12	4	0	15	0	20	0	1
	8分	23	3	2	1	14	4	0	13	0	0
長縄跳び の練習	10分	17	9	5	2	9	6	0	9	3	0
	12分	10	7	11	0	15	9	0	8	0	0
	14分	9	5	6	2	16	4	0	15	3	0
	16分	4	5	1	7	8	20	0	14	1	0
	18分	8	6	15	1	14	5	0	11	0	0
	20分	19	5	4	2	16	4	0	10	0	0
マット運 動の準備 と課題の 把握	22分	4	15	13	3	0	8	4	13	0	0
	24分	3	21	6	2	3	10	11	4	0	0
	26分	15	5	9	2	19	4	0	6	0	0
マット運 動の練習 (側転)	28分	4	9	8	2	0	11	8	14	4	0
	30分	10	7	6	2	6	10	12	7	0	0
	32分	13	7	10	1	15	2	4	8	0	0
	34分	14	2	10	0	13	7	2	10	2	0
マット運 動(連続 技)の練 習	36分	27	4	3	3	17	4	0	0	2	0
	38分	24	3	3	3	17	4	0	3	3	0
連続技の 発表	40分	35	3	5	4	2	5	0	5	1	0
	42分	14	6	12	4	1	8	6	7	2	0
課題把握	44分	16	0	1	6	2	1	0	10	0	24
整理運動	46分	34	0	4	8	12	0	0	2	0	0
	26秒 後片づけ ～挨拶	9	1	0	2	0	0	0	0	0	1
合 計		320	137	155	65	199	141	47	211	21	97
比 率 (%)		22.97	9.83	11.13	4.67	14.29	10.12	3.37	15.15	1.51	6.96

Ⅳ. 考 察

1. 1回目の授業について

(1)導入の段階(16分58秒まで)

授業の過程は、本時の予定説明→準備運動→示範→「めあて」の確認となっている。

準備運動まで(開始～8分22秒)の身体活動では、学習者の前に立って一斉に号令をかけての徒手・柔軟運動を実施したことによる⑧(20.72% - 8分22秒間において)と⑩(41.04% - 同)のカテゴリーが多い。また、「めあて」を把握させるために、7種類のマット運動の技を演技しており⑦が集中している(28秒間連続)。

このような授業の導入における傾向は、運動の得意な他の実習生にも多く見られる。いずれも指導者のやるとおりに学習者にそれを真似させることによって、課題の把握をさせるというものであり、教師主導型の教授法である。この教授法だと学習者の自発的な活動を生む機会を少なくしてしまうという問題点³⁾を抱えている。

マットを敷く準備(14分2秒～16分)では、⑧が多い(32.2%)が、そこでは場所を示す指示行為がなされている。ここでもマットの位置の図を掲示すれば、よりスムーズな準備が可能であったと思われる。1回目の授業ということで、その点の準備まで気付かなかったものであろう。

(2)展開の段階(35分38秒まで)

授業の過程は、既習の技の練習→今日の学習課題の確認(カード記入)→各人毎の技の練習とな

っている。

初めの既習技の練習時(16分58秒～20分56秒)における授業者の活動は、⑤のグループ間巡視が非常に多い(56.7% - 16分58秒～20分56秒間において)。ここでは、じっくり学習者のできばえを観察しながらというより、「どンドンやって」という声をかけに回るためのだけの巡視であって、学習者に対する「手当て」は一切見られなかった。

ところが、2度目の各人毎の課題練習(27分42秒～35分38秒)に入ると、⑧のカテゴリーが多く(31.8% - 27分42秒～35分38秒間において)、教師自らの身体をモデルとしながらの指示・説明が豊富であり、⑦の示範も使っている。しかし、この教授活動も巡回中にたまたま眼前に出現した学習者の問題点についてのアドバイスであり、指導の必要性の高いものから意図的に近づいて教授するという順序性は見られなかった。

(3)整理の段階(46分16秒まで)

授業の過程は、まとめの試技→今日の練習の成果の確認(カード記入)→口頭発表→整理運動→次時の確認となっている。

授業者がまとめの試技を実施中においては(35分38秒～39分40秒)、巡視のみになり、記入時にも巡視と立ち尽くしての観察行為が多く、カードに記入した内容について、学習者からの応答を引き出そうとする発問中(39分40秒～43分46秒)においても、意図的な動作は極端に少なく、マット運動練習中の指導ぶりとは対照的である。この35分38秒～43分46秒間における身体活動による意図

3) 土谷正規著『体育科扱いにくい単元の教え方 1. 基本の運動・ゲーム編』(明治図書, 1984)のpp. 16～18では、次のように指摘している。

「これからの指導は、教師が先ず教え、そのあと、子どものできることをさせよう、というようなものではない。(中略 - 引用者)

現場の授業の中には、指導のすじ道のまちがった場合に多く出くわすが、それは、先生が子どもたちに、『自分でやっていきなさい。』と、いっておきながら、みんなを集めて、『ここはこうしなさい。』と教えていることである。

ひとりひとりが自分なりに違った動きを見つけてとりくんでいるのを見届けたら、到底、一斉に同じことがらを教えようがないのであるが、うっかりしてそれをやっている先生が多いのである。(中略 - 引用者)

『これをやれ』と動きを示してしまっただけでは、せっかく自分でやり出した子どもの意欲を低下させてしまうので、その子どもなりに、違った動きをしようと思うように援助してやる必要がある。」

的な教授行為は、わずか9×2秒の出現があったのみである。

整理運動(43分50秒～44分58秒)では、準備運動と同様に号令をかけての一斉指導による徒手体操であった。

2 4回目の授業(研究授業)について

(1) 導入の段階(5分50秒まで)

授業の過程は、本時の予定説明→準備運動→長縄跳びの説明となっている。

準備運動までの身体活動(開始～4分2秒)では、1回目の授業と同様に、学習者の前に立って一斉に号令をかけての徒手体操を実施したことによる⑧・⑩が多い。S君の場合、実習期間中の体育の授業における準備運動では、いつも授業者が前に立っての一斉指導の方法をとっていた。この教師主導型による方法は1回目の授業と変わっていない点である。

長縄跳びの説明(4分2秒～5分40秒)で⑧が続いているところでは、縄の回し方を身振りで示しながらの説明を行っている。ここでの説明では、練習要領の掲示を活用しており、1回目にはない用意ができていた。

(2) 展開の段階(38分まで)

授業の過程では、長縄跳びの練習→1分間での回数確認→逆回しでの練習→マット運動の課題の確認→マットの準備→示範→側転の練習→連続技の練習となっている。

初めの長縄跳びの練習(5分40秒～8分56秒)

では、⑤・⑧・①のカテゴリーが多い。ここでは巡視しながら、回旋している縄に続いて入ることへの指示が出されていた。また、入るタイミングがつかめない学習者に対しての補助が一度あり、示範によるリードばかりではなく、学習者の能力を考えた教授行為を試行するようになったことが、1回目の授業とは変化している点である。これは次の「1分間で跳べる回数への挑戦」の場面(8分56秒～11分10秒)においても見られ、できない学習者がいた場合には、その個人に対する指導を優先的に入れるようになっていた。

逆回しの練習(11分10秒～14分28秒)においての⑧は、縄に飛び込んでいくタイミングを指示することに費やされていた。また、特に苦手な者については、口頭や身振りの説明ばかりでなく、縄に入っていくタイミングについて背中を授業者の手で押す補助行為によって理解させようともしていた。しかし、結果としては未だその学習者には技能の定着は見られなかった。このように教授活動には、技能が低い者に対する配慮が生ずるという変化も見られるようにはなったが、側転の示範と説明(19分30秒～23分48秒)においては、再び自らが模範演技を行って「めあて」の把握をさせようとしており、ここでも学習者自身の動きの中から問題点の解決法を考えさせようという教授法ではなく、1回目の授業と同様に教師主導型の教授法であることには変わりがなかった。

側転の練習中(23分48秒～32分4秒)の行動では各カテゴリーが分散している。(表-3参照)

表3 4回目授業におけるマット運動の側転の練習中の教師の身体活動

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
カテゴリー数	43	28	33	8	45	27	24	35	4	0
比率(%)	17.4	11.3	13.4	3.2	18.2	10.9	9.7	14.2	1.6	0

表4 4回目授業におけるマット運動の連続技の練習中の教師の身体活動

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
カテゴリー数	57	8	6	6	43	13	0	7	7	0
比率 (%)	38.8	5.4	4.1	4.1	29.3	8.8	0	4.8	4.8	0

1回目の授業では、立て続けの指示・説明の身体活動であったが、ここでは①と⑤が多く、学習者のできばえを観察しているともとれる。

連続技の練習(32分4秒~38分)では、できる種目での連続技の練習だったので、側転の練習時よりも説明・指示の身体活動は減っており、①と⑤が多い(表-4参照)。

(3) 整理の段階(46分26秒まで)

授業の過程は、連続技の演技の発表と感想発表→次時の課題の確認→整理運動→マットの片づけ→礼となっている。

連続技の演技の発表では、3人の学習者の演技の観察中心のため、①が多い。学習者との発問・応答では、学習者からの積極的な答えは出てこなかった(38分~41分6秒)。従って、次時の課題の確認(41分6秒~42分42秒)では、学習者の意見からではなく、授業者の当初からの案を持ち出さざるを得なかった。そこでは、連続技のつなぎの部分の工夫について、⑦と⑧のカテゴリーで例示の演技を見せる手法を用いており、ここでも教師主導型の教授法になってしまった。授業者が運動能力に優れていても、教師としての発問の内容が的確でなければ、学習者の自発的学習は生起しないという曲型的事例でもあった。今後、学部教育の実技教科の指導の面においても、発問内容の吟味は十分になされるべきことと考える。

整理運動(42分42秒~43分48秒)でも、教師主導型の一斉指導による徒手体操であった。

マットの片づけ(43分48秒~46分26秒)では、学習者は積極的に活動しており、授業者からの指示・説明はなくともスムーズに終了していた。マットのしまう場所は一定であり、習慣化されていたものであろう。

V まとめ

体育の授業分析では、教師の身体活動にも検討の目を向けなければならないとして、ここでは特に、身体動作によって教師の意図を表現している身体活動の分布状況が、教壇実習の実施の過程でどのように変化しているかを述べた。

授業内容の構成は、4回目の授業の方が豊富であり、構成そのものは体験の積み重ねの成果が出ているとも思える。しかし、身体活動の数量の変化だけでは授業診断までには至らない。どのカテゴリーが多いから体育授業として成功である、という基準値のようなものは未だできあがっていないし、固定的には考えにくいものである。

上記の限界を感じながら、ここでは授業の各場面毎の言語記録も参考にしながら身体活動による教授活動についての特徴を求べる。

一つには、教師主導型の教授法が1回目も4回目にも一貫してなされており、教育実習段階におけるS君の教授法の傾向は固定化していた。

二つには、1回目の授業の練習場面において、教授活動のための身体活動が、あるカテゴリーに

集中する傾向があった。そこでは学習者の実態を無視する場面もあり、授業案通りの進行を第一に考えていたのではないかと推察する。

三つには、4回目になると、回数は多くはないが運動の苦手な者に対する丁寧な教授活動が見られた。しかし、身体活動全体の中では援助の活動はもっとも少ない。見本を見せての教授法中心であった。

S君は、教育実習中に体育授業については4回の教壇実習ができた。他の多くの実習生は、1・

2回程度であり、中には1回もやらずに実習を終える学生もいる。4回も授業を行ったS君ですらこの実習中では、教授法の大きな転換は見られなかった。今後の彼等自身の研鑽に期待するほかはない。

彼等の今後の体育授業における実践的指導力の形成過程の解明については、言語活動と身体活動とを合わせ、また質的分析と量的分析とを組み合わせた方法を検討し、取り組んでいく予定である。